



長良抄  
三五記抄  
全

伊地知文庫  
文庫20  
197



長良抄  
長短抄

小字長良三卷目録  
上ノ巻目録



伊地知氏書冊

長良抄

闇夜一燈



又連歌の形一は月の昔と思ひ并宮に  
 い舟一は暮少を路路の明さいと形一  
 今心の交りすも舟人の心は形り色も梅を  
 折こなるさやのこ舟一は梅の舟もあ  
 好中一も一は先長秋の舟よあ路をばあ  
 そまの舟よハ甚々の舟をおのりうら  
 中舟よ一氷舟の舟よふらさよ船中を  
 舟よ山家の舟よを氣色毎舟よ今味一舟  
 舟よ舟よ不遠玄玄の舟よ入舟一舟

字祇云何つまらむの時旅麻の麻の字是  
 う字長袖方羽束の字はうらまはす  
 連歌の字所と云ふはそと自云ふは  
 世と初出の中と云ふはそと自云ふは  
 皆くわりの所なれとそと自云ふは  
 風情と云ふはそと自云ふは  
 一はゆりゆり出と云ふはそと自云ふは  
 一はゆりゆり出と云ふはそと自云ふは  
 一はゆりゆり出と云ふはそと自云ふは  
 一はゆりゆり出と云ふはそと自云ふは

竹所之詞

- 一 和うた  
天地括雲夕  
厚まは秋
- 一 行  
月日ま秋水  
鳥歎雲
- 一 竹  
氷細水夕  
玄路霜帯
- 一 言  
草平山河音  
賦

一消返

露霜雪雲

灯命

一山や

月日澄

霜風

一強返

月日露雪

高去種雲

一欠云

車月日

時返

一牛山

鳥声雁雲

秋月日秋松

一守

月日澄郭云

床の音

一足

花月音

夕

一酒返

月日澄世

厚

一守

月日思恨

一守返

山雲衣

一亭

花世旅去秋

一亭

此月思髮

一亭

蝶鳥世雲

一亭

水子月花鳥

一亭

雲洞和鏡

鳥花世雲

一亭

月花露夏

一亭

日洞水

雲夏時白露

一亭

雲在

郭云鳥麻

一亭

瑞風水舟

松風蕪渚

一亭

水波

月花時鳥

去秋

一過留

時雨自内来

一火

黄心子母

衣干

くひ火

水煙

いさく火

きしきん

一松升煙

物ふこのる

内器鴨居

一挿ぬ

高相

一しほしき

娘在死地友

一しうあき

霧の死命

在牙

霧の花首

一帆なる

在

命松有明

一眺向

一返ん

雲香山月

身

一 移

嘉酒厚

一 眼

虫さし

一 髪

花山霧の風

一 好

草の香鳥

一 海

水山亭寂音

一 出

野山船月日

一 海

月雪花雲

一 丘

水山月世庵

一 海

水小蝶雲月

一 井

衣碓浪

長秋船

一 巾

香雲樓  
竹葉鳥

一 端

鳥居  
去秋雲

一 子

月泉郭云

一 事

去秋鳥  
歎

一 記

野分  
夏康

一 道

康水  
野山

一 明

月  
斬齡

一 友

月  
花居  
瑞鳥

一 明

雲  
水鳥  
神

一 記

松  
木  
船  
橋  
雲  
神

一延命

延命心

一法外

法外馬心

一折

花より書本  
紫華也花

一書

内学社の書  
琴

一吹

笛吹の心

一灯

灯法心

一燈火

里舟の心

一法心

黄神の月姫心

一如心

高五和族  
の月法心

一動心

清水石の心

一 おまじ

世蘇神身

一 色々

露衣扇身

一 色々

姉妹

一 色々

黄柳柳

一 色々

柴扇

鳥さす也雲風  
襦

一 色々

麓行々系

一 色々

野山

日命子の綴子

一 色々

衣襦

一 色々

衣襦

一 色々

衣襦

一 牛

道命格身

一 果

去好命身

一 好

除竹系身

一 日

每日新笠沙

棹店

一 心

去秋梅香  
心身

一 如

野山水霜  
只の音 冬

右 岩 洞 目 他 唯

春之連歌

あけのぼる 春の朝 霞をまきぬる 雲

あけのぼる

あけのぼる 春の朝 霞をまきぬる 雲









長經抄

史之十一字と長經抄一と懐との懐とを  
去る史を業平作持因持の傳よ父の時常  
野邊より流しりりて盃を侍り  
佐いしらの雲れをと一たひ侍より  
今よ到るまじぬ士の心おれ一毎らり  
思ふ心あり可一なきはまぬあつたるハ書  
一室よ祇と住吉のちけのお徳のいり  
ちよやふる多れと一成志一とくを  
七句れを解及ぬまてる業平の花の影よ

傳抱して春秋の職候を悟り遠席の  
月のりよ今家一は穠之の園をと思へ  
く雅之の身とくさくさ一左室とくさくさ  
眼よあはれさるる成ふよ身とくさくさ  
韻の梅くさくさくさくさくさくさくさ  
す一侍くさくさくさくさくさくさくさ  
とわらばくさくさくさくさくさくさくさ  
記よ十神奥方御座りく今管とくさくさ  
はえとくさくさくさくさくさくさくさ  
るくさくさくさくさくさくさくさ

くさくさくさくさ

才一幽玄程

行行雲迴雪

洞よりこれいづれの月

これ流の長る所を流る

行雲神

有る將書念は

今さしりしんは

月とん、形、長、の山、

廻雲神

余は、物、心、と、之、

形、見、た、る、す、

ま、ま、と、も、

才二長高程 行行山を白沓悔

く、は、よ、い、

ま、た、と、お、

高山程 途は海、

その、大、れ、

ま、ま、

色白神 仕事と

月、

度、

澄海程 心と澄、

行、

思ふにゆく月の終なる月とて

中三有心裡 付表神 不明神

物表神

定と思せる月の音く

惚れぬとを徳よすは

不明神

さよよける身とて

むのひさし

中三有心裡

惚れぬとを徳よすは

中三有心裡 付表神 不明神

惚れぬとを徳よすは

うに花を花り上の花

中五更とて神

草の居を

思ふに花を

中六面白神

思ふに花を

花の時を

中七濃神

花の時を

花の時を

花を花り上の花

思ふに花を

惚れぬとを徳よすは

中八見極裡

おれら持のまきおれら  
あまをいれ極のいせ  
中八見極裡

活のいせをいせと若る

おれら持のまきおれら

中十極見極裡

あまをいれ極のいせ  
おれら持のまきおれら

手赤葉北口傳

一七のやの夜

只念のや みるうんたの夜  
切や なるや若うれ  
中八見極裡  
あまをいれ極のいせ  
おれら持のまきおれら

勝北や

町とみん

吉原六九日申と八日角の目

是合と八二日や

一申く首し押字五

色 月も月手と世と世その世  
は みよとの世と世の世  
も 終る世と世の世  
も 一つ一つと世の世

うね 高しと世の世

一世のよの世と世

ろ 是世と世の世  
か 里人の世と世  
よ 一よこの世と世

一申く世と世

と世と世の世と世  
と世と世の世と世

春の野はいつこの部は家も上り  
右のつらつたまもと指ささるる  
よくてるる

一市白れてるる之は又大座と押くる  
形

野の林へ花を折る  
まよふあられるる月を  
奥へあつるる有は侍師也

一二一れ度

是ーー ぶーー ぶーー さいさのー  
山さー まーー 月さー さい改在のー  
まーー ぶさー ぶさー さい改在のー

一乃西れ事

ふ 編りのまもはさのさあ  
く せりのまもは好まなく  
は 舟も所とあつるる  
つ まと切るるまもはさ



一 ぼろぼろの髪を押しもろろ  
あつたう 押字の髪  
あつたう 押字の髪

一 ぼろぼろの髪を押しもろろ

一 皮肉骨の連歌

一 皮肉骨の連歌

一 皮肉骨の連歌

一 皮肉骨の連歌

一 皮肉骨の連歌

一 皮肉骨の連歌



三五記抄

和歌ハ徳道ノ源ナリ善法ト進家要法ナリ  
此中寔ナリ成徳在る事ヲ云フ自具如相  
と想ヘ春秋の抄ニ成るる物ハ法理と云  
物と云ヘ毎句と云風賦比興雅頌の云  
事と云ト云六道編廻の事と云事ナリ  
凡ハ源ナリ成徳賦を云ヘ并の事と云事  
比々云々自々云々事と云雅ハ比云  
頌云々事と云事と云事と云事と云事  
之ある事ト云事ト云事ト云事ト云事

と黄門ふさふさのねを送迎は弁願師も  
高は山味一を 香かよねこれ菊目と那  
浮松のりひひりひりひりひりひりひり  
ちを今来るよは後一は。

中一風

ふさふさ目よは原ち  
色山と思ひしは山味一  
本のりを産のよえしねる

中二賦

山味一山味一  
水暗く山味一  
とられうとられう

中三比

物よあはくふ  
色山を初の下なる産  
新とえんねのねのち

中四具

物よあはくふ

川音を指よくはしを山に  
雁のうぐさの夕種も於

中五雅

中五雅 中五雅 中五雅

梅の香よつねにわたりて月夜  
何とぞくし山を産香くん産

中六頌

中六頌 中六頌 中六頌

津のゆるぎ代このあさく  
照しや世々の世の世の日

一切字之事

花打今よる花の山路に  
もる 村を山なりわ声もくね

り 移りけりたる世のまの音

事子 主くくを流音移るまの庭

じ とりこむ花のよるまの庭

て 新くし桐の葉くくく枝のあ  
も 和音の庭をふのちくも於  
そ 白を花をけりひくもやうく

か 秋深し高き氷の千石部  
や 高き山花の梢の影  
や 時をよみぬくのはよ  
久 花影を誰か山にまき  
き 花ハ氷山と千入る  
り 雪よりも葉をまけ  
い 月よりも花のまきの  
い 種のを今よりい  
い 々々々々々々々々  
く 花と竹ハ雪ハ氷

誰か 誰かの影の  
花 花を  
雪 雪の影  
深 深  
雪 雪  
け け  
ま ま  
な な  
め 梅

古より母一夫中一のふふ筆

石翁白相傳口傳く変

一説は翁白

此より人々をたふさるるや  
名をさすは月や梅を打はるる  
水空一山や言ふは海を  
古説は翁白口傳師説く有る  
一夫廻く翁白く変 口傳く  
あはれはくはとまはれくは玉清傳

深むるふもふの月の小長財也

永享年中一山野百白

御所板山翁白

みづの地乃好くそくはまの香  
とむりしはと梵野店のはまにまをそくは  
は山は流ハ流をたは翁白はるるすあは  
の存知をとしはれはつるはとくは川を  
こそはくはと山持はるるは那の住居  
あはれは流石のくはくはるるはくは

一 三修切之巻 在得

花を細柳と髪ととよみ海月  
其月布とこのまのまのまのま  
古三修切巻の中事と得と事と

一 五巻 一之巻 得と

花をねまはまのまのまのま  
古新よ  
おまのりーとまのまのまのま  
おまのりーとまのまのまのま

花の名巻の白紙ハ之を巾着とす  
能く師次す

一 七巻 一乃巻

花のまのまのまのまのまのま  
い巻のつれまのまのまのまのま  
おまのりーとまのまのまのま

一 八巻 一乃巻

花の名巻の白紙ハ之を巾着とす

ついでに中之の句種はひらきまゝに  
西よりおれまゝ  
名も涼し味もあまじき  
いさむしはたし師匠語

一 臥字切之事

花やいしくゆき神にぬきまほる  
おんをさるゝ水しはれま

一 邦名不詞語句之類

右山より水の流るるなる

一 一 切字之事

こゝの——まじりか切  
一方は之ぬ山や——郭に 現在の  
よもあししはよくら不の山極  
終るこゝ現在未本との——す若く之事

一 一 今之世法之事

毎日の語句は時中によろそむ政をなし



竹の如く大日心の下に坐して海濱に坐す如く日  
印の如く坐す如く坐す如く坐す如く坐す

坐す如く坐す如く坐す如く坐す如く坐す

神の如く坐す如く坐す如く坐す如く坐す

一 正つた連系此の中

坐す如く坐す如く坐す如く坐す如く坐す  
坐す如く坐す如く坐す如く坐す如く坐す  
坐す如く坐す如く坐す如く坐す如く坐す  
坐す如く坐す如く坐す如く坐す如く坐す

一 連歌の如く坐す如く坐す如く坐す如く坐す  
坐す如く坐す如く坐す如く坐す如く坐す  
坐す如く坐す如く坐す如く坐す如く坐す  
坐す如く坐す如く坐す如く坐す如く坐す

て八の如く坐す如く坐す如く坐す如く坐す

一 夢想の連歌如く坐す如く坐す如く坐す

坐す如く坐す如く坐す如く坐す如く坐す

坐す如く坐す如く坐す如く坐す如く坐す  
坐す如く坐す如く坐す如く坐す如く坐す  
坐す如く坐す如く坐す如く坐す如く坐す  
坐す如く坐す如く坐す如く坐す如く坐す

坐す如く坐す如く坐す如く坐す如く坐す

一 坐す如く坐す如く坐す如く坐す如く坐す

坐す如く坐す如く坐す如く坐す如く坐す

坐す如く坐す如く坐す如く坐す如く坐す













享保十五戌秋八月十九日寫於  
浪華今書寫之者也

鳩信

安永七年冬十月廿五日奉  
請許借書寫之焉

歸耕

此書推門二用申由白飛申候

